

夢と希望に満ちた

AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業

プラットフォーム連携チーム
宝塚リトリート2023
まとめと提言

令和5年10月2日－3日

於 宝塚ワシントンホテル

宝塚リトリート2023 参加者と趣旨

2023年10月2日－10月3日 会場：兵庫県宝塚市 宝塚ワシントンホテル

●理化学研究所

- 小林 紀郎 ○ (基盤研究開発部門 副部門長)
- 實本 英之 (データ管理システム開発ユニット ユニットリーダー)
- 菊地 伸治 (データ管理システム開発ユニット 上級技師)

●大阪大学

- 古谷 浩志 ○ (コアファシリティ機構 機構長補佐)
- 甲斐 尚人 (付属図書館 研究開発室)
- 田主 英之 (サイバーメディアセンター
高性能計算・データ分析融合基盤協働研究所)
- 松浦 かな (コアファシリティ機構)
- 三木 保孝 (情報推進部)
- 寺前 勇希 (情報推進部)
- 向園 悠 (情報推進部)
- 唐牛 譲 (コアファシリティ機構)

●名古屋大学

- 青木 学聡 ○ (情報戦略室)

●東京大学

- 小林 博樹 ○ (情報基盤センター 教授)

●国立情報学研究所

- 中野 恵一 ○ (オープンサイエンス基盤研究センター 特任研究員)
 - 古川 雅子 (教授)
 - 長岡 千香子 (特任助教)
- (計16名)

趣旨

真に研究者の利益となり、真に科学・技術の進歩を加速する、情報基盤・データエコシステム・枠組みといった我々の進むべき道筋や方向性を、情報科学者・実験研究者・研究経営者らと共に議論し検討する。

このため、研究データエコの推進会議やプラットフォーム連携推進会議等の限られた時間では議論できない、研究データ管理や研究データ利活用に関する、事例や研究環境を踏まえた建設的な議論を行う。

議論の範囲は、プラットフォーム連携に限らず、人材育成、ルール・ガイドライン、研究事例、プラットフォーム構築を含めた情報基盤全般を含むとし、特定の領域やトピックを限定しない。なお、具体的な研究事情に合わせて議論した方が良いトピックについては、例えば研究分野を限定することは差し支えない。



宝塚リトリート2023の背景と進行経過

1. Gakunin-RDM（以下、GRDMと略）は、日本の研究を支える重要基盤であり、皆、非常に期待している。しかし、事業参画機関には、GRDMが「研究者の助け」になりそうだと感じられていなかった。
2. リトリートに参加した各機関より、研究データエコシステム構築事業において担当している事項の進捗状況や課題等を紹介してもらい、それを基にオープンに議論をし、何が根源的な課題・問題であるかについて探った（1日目）。
3. その結果、次の3点に問題が集約されることが分かった。
 - ① **現在のGRDMは、研究者の研究の進め方(Research Practice)の何処・どの領域をどう手助けするのか明確に意識されていない（あるいは明示されていない）**
 - ② **不明確である分、現実のResearch Practiceに対応した、現実的に役立つ機能提供がされていない（あるいは、そのように感じられる）。また、どのように他機関が自分のサービスを組み立て、GRDMと連携・役割分担すれば良いか不明**
 - ③ **GRDMの果たすべき役割や方向性について、GRDMサービス提供側と事業参画機関との間で“同じ絵”を共有できていない。そのため、NII(GRDM)と参画機関との役割分担も不明確**
4. GRDMサービス構築・提供側の認識と、GRDMユーザーサイド(NII以外の機関)の認識・希望とを摺り合わせ、全員がGRDMに関して「**同じ絵**」が見えるように議論した。

宝塚リトリート2023
での議論を通して到達した
共通理解と課題認識

自然科学研究の進め方・プロセスとGakuNin-RDMの関わり

Research Practice in Natural Science

宝塚リトリート2023 Output
自然科学研究の進め方・プロセスの
実際を意識して、GakuNin-RDMの
役割を定義し機能を作っていく
必要がある

Research Data Life Cycle

Daily Research Cycle



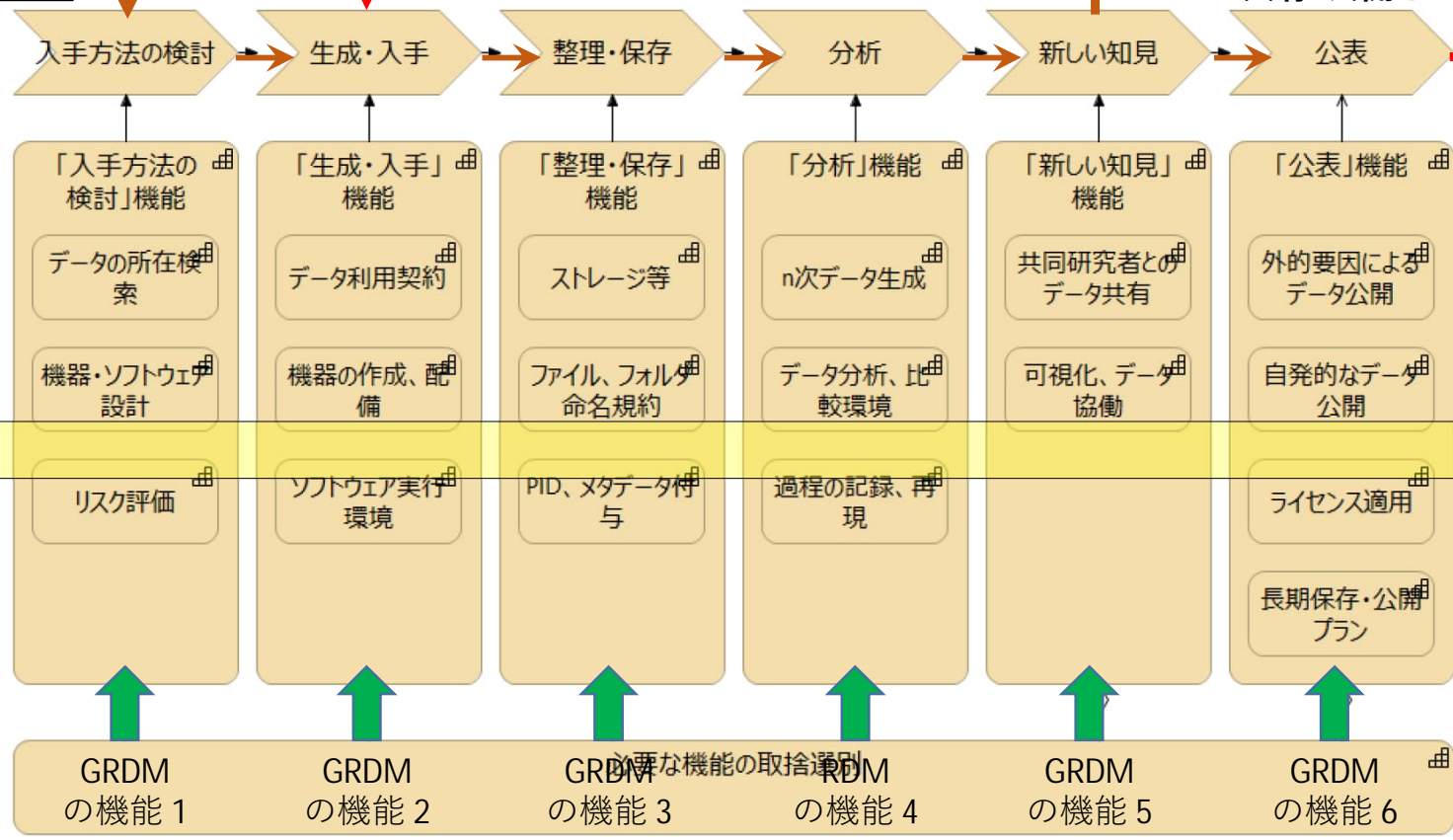
Project Initiation

研究
ステップ

要素

研究
Project
管理ツール
(電子実験ノート)

機能



青木学聡 (2021)
を基に改変

青木学聡 (2021), “組織的RDM 支援サービスのためのエンタープライズアーキテクチャの検討”, 情報学会研究報告, 2021-IOT-055. <http://id.nii.ac.jp/1001/00212548/>

図 2: 「研究データライフサイクル」のバリューストリーム-ケイパビリティマッピングの例

詳細説明・補足

1. 宝塚リトリートの参加者の間では、GakuNin-RDMに関する今後の方向性—という点において、前ページの**“大きな絵”**（基本コンセプト）を皆で共有し進めるべきだ—との共通理解に到った。
2. この**“大きな絵”**（基本コンセプト）を、GakuNin-RDMを構築しているNIIとも共有し、本事業の進めていく必要がある。
 - NIIも含めたリトリートを企画する。
11-12月：R6年度計画に反映できるようできるだけ早く。
NIIの方の日程優先、1泊2日、場所は日程を決めてから。NIIのチーム担当者も含めて。+各機関1-2名。PF連携チームが主催）。ユースケースの方にも参加してもらい、基本コンセプトが実際のGRDMユーザーにSounds Goodなのか意見を貰う
3. これらの共通理解（**“大きな絵”**）を基に、様々なチーム・部門・担当者と連携・協働・戦略立案・機能追加などの話を進めたい。
4. この**“大きな絵”**（基本コンセプト図）を他の参画チームとも共有したい。
5. 実際にGakuNin-RDMを使う/使うであろう、研究者に実際に意見を聞く必要がある。インタビューや試し利用などする必要がある。（NIIとのリトリートにおいて、ユースケース採択者を対象にまずは行う）
6. 研究分野によって異なるResearch Practiceがあり、**“大きな絵”**（基本コンセプト）が全ての研究分野をカバーできる訳ではない。しかし、自然科学研究分野のMajorな部分（生命・材料・化学など）をカバーしている。それ故に、これを基本として進めるのが良い。
研究分野ごとに、「このコンセプトから外れる・欠けている部分はどこでしょうか？」と聞くなどが良いのではないかな？
7. 機関によっては、「研究ステップ〇〇までは自前でやる」や「△△のプロセスはこちらを使う」ということもあるだろう。**“大きな絵”**という共通理解の基に、役割分担ができるデザインも必要ではないか？（どうやって連携させるか/させないかは、話し合いながら決めていく重要なポイント）
8. 研究Projectマネジメント機能（例えば電子実験ノートなど）の充実が、研究プロセスに横串を入れる重要なポイントの1つ（生命・材料・化学系では必ず実験ノートが使われており、それが研究Projectマネジメント的な機能を持っている）。